

ウィニフレッド・ワトソン作  
最所篤子訳

## ミス・ペティグールの素敵な一日

Miss Pettigrew Lives for a Day, by Winifred Watson, Translated by Atsuko Saisho

第六章 午後三時一三分 午後三時四四分

「あら！」とミス・ペティグールは驚いた声を出しました。

目を奪うような魅力的なご婦人が飛び込んできてミス・ペティグールは危うくひっくり返りそうになったのです。口をぼかんとあけ、目をぱちくりしてその素敵なご婦人を食い入るように見つめました。その女性は若くて、ほっそりとしていて、人目をひく姿をしています。濃いクリームのような白い肌、色といったら弓なりの唇の色つばい深紅のルージュだけ。髪はまるで漆のように真っ黒で、真ん中でわけ、すばらしく凝ったカールが首筋にのっています。ちっぼけな帽子が頭の片側にひどく傾いて、ちょこんと留まっています。黒い眉は珍しい角度でカーブを描き、その下には黒髪の人には珍しい、驚くほど鮮やかな青い瞳が輝いています。長い黒いまつげは、どんなに有名な映画スタールにも負けないほど、濃くてカールしていて、ミス・ペティグールは胸を躍らせました。鮮やかな緑色のイヤリングが、頭にぴったりとくっついている小さな貝殻のような耳から下がっています。動くたびに、香水が、ほんのりと誘いかけるように漂い、ミス・ペティグールをうっとりさせました。おまけにその服装ときたら……なんていえばいいのでしょうか。ミス・ペティグールの人生経験では、パリ仕立てのドレスがどんなだか言葉で表すなんて無理な話です。そのご婦人は毛皮のコートの前をぱっとはだけると、手袋をソファの上に投げました。ここに腰をすえるつもりのおようです。ミス・ペティグールは向きを変えると、入り口のドアを閉めました。

お客様は心ここにあらずという様子で部屋を見渡しました。

「あなた、会ったことないわね」

「ごさいません」とミス・ペティグールは言いました。

「デリシアはいる？」

「おいでです」

「彼女に会わなくちゃ。どうしても会わないとだめなの。会える？」

「もちろんですわ」とミス・ペティグール。



島田圭子画

「つまりね」と閉じた寝室のドアに必死の視線を向けます。「邪魔するつもりはないのよ。ニックが戻ったんでしょ」

「ミス・ラフォースはお一人ですわ」

「ああよかった!」

「お名前をおっしゃってくださいたら」とミス・ペティグルーは親切に言いました。「ミス・ラフォースにおいでをお知らせ申し上げますが」

ところがもうこのお客様はドアのほうに行くところでした。肩越しに驚いた顔を向けて、

「あらいいのよ。友達だもの」。

そしてさっさとドアのところに行って、ぱっと開けました。

「デリシア」

「出てって」とミス・ラフォース。

「話があるのよ」

「分かってるわよ。いつだってそうじゃないの。だから出てってって言ったのよ。今、忙しいの。お化粧しているとき邪魔されると、間違ってお化けみたいな顔になっちゃう。もうちょっとだから」

「どうしても話を聞いてもらいたいの」

「グウィネヴィア」とミス・ラフォースが呼びました。

「ただいま」とミス・ペティグルーはいそいそと答えました。

「エディス、こちらグウィネヴィアよ。彼女が面倒みてくれるわ。グウィネヴィア、こちらエディス。お願いだからエディスをつれてって、一緒に何かして。この人、ほん」と手に負えないの。あたし、もうちょっとで終わるから」

「喜んで」とミス・ペティグルーはまたいそいそと答えました。

寢室のドアをぴたりと閉めます。ミス・ラフォースは邪魔されたくないのです。それなら邪魔されてはいけません。ミス・ペティグルーは少しおぼろげとお客様のほうに向き直りました。このような若い女性にどう話しかけていいものやら見当がつかなかったのです。みんながみんな、ミス・ラフォースのように分かりやすくして親切とは限りません。

「姓はペティグルーと申しますの」なんだか申し訳なさそうに言いました。お客様は名前呼び合つのをなれなれしすぎると思つたかもしれません。

「ああ、あたしはデユバリーよ」

「ご機嫌はいかがでございますしょう？」とミス・ペティグルーは礼儀正しく言いました。

「最低よ」とミス・デユバリー。「あなたは？」

「あ、あたくし……結構ですわ」と、おたおたと言つてから、あわててお上品な何気なさを装います。「たいへん結構ですわ」

「じゃあ、あなたは家庭におさまってるんだわ」とミス・デユバリーが不吉な声を出しました。「そつじやなきや恋をしてないのよ。あたしはそのどつちでもないの」

「なにがどつちでもないですって？」とミス・ペティグルーは驚いて、礼儀も忘れて聞き返しました。

「あたしは家庭におさまつていなくて、恋をしているの」

「まあ！」とミス・ペティグルーは興味をひかれ、目を輝かせました。これは面白そうです。「なんて素敵なんでしょう」

「素敵？」とミス・デユバリーは大声を出しました。「素敵ですって？ あの最低野郎に捨てられたつていうのに？」

「まあ、なんて悲しいこと！」とミス・ペティグルーはため息をつきました。

「まさに悲劇よ」とミス・デユバリーがうめきます。「だからデリシアに会いにきたの」

彼女、頭いいのよ。生まれつき美人のくせしてね。だまされちゃだめよ」

「だまされませんとも」とミス・ペティグルー。  
「そうね。だまされないでしょうね。だまされるのは男だから。男つてあの人美人だから、脳細胞なんて持っているわけがないと思つちゃうの。で、うまくのせようとするの。もちろん、それでひどい目にあつたよ」

「ひどい目にあつて当然ですわ」とミス・ペティグルーは勢い込んで言いましたが、いったいなんのことやらちんぷんかんぷんです。

「あたしもそう言ってるのよ。でも彼女は頭がいいの。だからうまくやってるのよ。あたしはだめ。いつもごたごたになつちゃう」

そして悲しげに部屋を見回したので、心優しいミス・ペティグルーはほろりとなりました。

「おかけなさいな」とミス・ペティグルーは優しく言いました。

「ありがとう。そつするわ」

ミス・デュバリーは腰掛けました。

「男つて最低よ」とミス・デュバリーは嘆きます。

「たしかに」とミス・ペティグール。

自分たちが何について会話しているのか、いまひとつよく分かりませんでした。ミス・ペティグールは気にしませんでした。何しろ面白くてしかたありません。酔ったような気分です。こんなふうには話しかけてくれた人はこれまで一人だっただけです。会話の変てこなところがまた、ぞくぞくするほど面白いのです。考えて見ると、これまでどんな話だろうが、わざわざミス・ペティグールにしようという人はほとんどいませんでした。とにかく個人的な話については。でも、この人たちがきたらどうでしょう！この人たちは平気で心のうちを明かします。ミス・ペティグールを認めて、仲間の一人にしてくれます。この人たちが人を受け入れるやり方ときたら驚くばかり。それを思うと、身体中の神経がさかだつてびりびりしてきます。驚いた顔をするどころか、ただ、「ハロー」と挨拶して、それでも仲間入りなのです。立場やら家柄やら銀行の貯金残高やらの心配なんかありません。ずっと一人ぼっちで暮らしてきたミス・ペティグールは、これまでどんなに自分が孤独だったか、気づいていませんでした。今日一日、一人じゃなくなつて、はじめて気がついたのです。その違いを細かく分析することはできませんでした。ただ、長年、他人の家に住み込んでいて、ただの一度もその家の一員という感じを味わったことはありませんでした。けれど、今日、このたった数時間の間に、見事にしっくりなじむことができました。あたくしは受け入れてもらえたんだわ。この人たちは、あたくしに話をしてくださるんですもの。

それにこの人たちの話し方といったら！今まで、こんな聞いたこともありませんでした。前後のつながりなんてお構いなし。一言、ひとことがアルコールの強いカクテルのようです。ウィットの香りあふれるセリフの連続で、悪戯っぽいしゃれた気分になつてきました。しかもあたくしついたらあんなにうまく切り返したりして！「こんなこと、はじめてだなんて誰も夢にも思わないでしょう。」

「あたくしにこんなところがあったなんて」とミス・ペティグールは誇らしく思いました。「ちっとも知らなかった」

立ち上がると、ここにこしながらミス・デュバリーを見下ろします。ミス・デュバリーは憂鬱そうに電気暖炉を見つめ、自分のおかげで友達のデリシアのそのまた友達が感激していることなど気がついていません。ミス・ペティグールは、何とかしてミス・デュバリーを慰めなければと思いました。さあ、気持ちを盛り上げます。何気なく、気楽に、こだわらない感じで 何百ものトーキー映画で見たとおりに

「一杯いかが」とミス・ペティグールは言いました。

ミス・デュバリーはにっこりしました。

「いいわね。気晴らしになるわ」

ミス・ペティグールはふたたびキッチンの戸棚に向かいました。ずっしりとしたお盆

を手に戻ってきます。目についたお酒の瓶をほとんど全部、運んできたのです。

「ご自分でお作りになったほうがいいわ」と機嫌よく言います。「自分の毒は自分で混ぜろってね。あたくし、いつもそう言ってるんですの」

ミス・デュバリーはいそいそと立ち上がりました。

「ジンをほんのちよつとと、それから……ライム・ジュースはある？ ああ、あつたわ。

ジン&ライムを飲むと元気になるの」

ミス・ペティグルーは気づかれぬようにミス・デュバリーのやっていることを観察しました。

「あなたは？」とミス・デュバリーがすすめます。ミス・ペティグルーはぎよつとしました。でも「とんでもない」という言葉が口元まででかかったところで、考えが変わりました。今はくそ真面目な顔をする時ではありません。もてなし役はお客様と一緒に飲まなければ。

「自分で作りますわ」とミス・ペティグルーは向こう見ずにも言いました。

「OK」

ミス・デュバリーはお酒を持って椅子に戻ります。ミス・ペティグルーはざつとグラスにソーダを注ぎ、格好をつけるためにシェリーで色をつけました。そして椅子に戻りました。

マッド・イン・コフ・アイズ  
「君の瞳に乾杯」とミス・デュバリーが言いました。

うまい言い回しを知らないミス・ペティグルーは、自分で作ってしまいました。

マッド  
「泥は流して洗いましょう」

二人はお酒を飲みました。

「お代わりは？」とミス・ペティグルー。

「やめておいたほうがいいと思う」とミス・デュバリーが残念そうに言いました。「だって、オギルヴィー家に顔を出すなら、しらぶで到着しなきゃ。ほとんど必ず、酔っ払って帰るんだもの」

「たしかに」とミス・ペティグルー。

「それにね、もしトニーが来ていたら、頭が働かないと困るもの」

「そのとおり」

「だから、お代わりは遠慮しておくわ」

「じゃ、バーは閉店」とミス・ペティグルー。

「でもね、ほんのちよつぴりひっかけるだけなら」とミス・デュバリー。

そこでミス・デュバリーはひっかきました。もつ、さっきよりずいぶんと朗らかに見えます。お葬式のような沈うつな雰囲気はほとんど消えてしまいました。ミス・デュバリーはミス・ペティグルーを興味しんしんな顔で見ると、平気で好奇心を満足させはじ

めました。

「デリシアの友達なの？」

ミス・ペティグルーはつま先をじっと見つめ、次に閉じた寝室のドアに目をやり、それからミス・デュバリーの顔を見ました。

「はあ」

「親しいの？」

「とても」とミス・ペティグルーは嘘をつきました。

「そう」とミス・デュバリーは言って、『デリシアの友達はあたしの友達』っていつも言ってるのよ」

「ありがとうございます」

「彼女ってね、人を見ると、あたしには分からないものを見抜くの。あの人の目にぜったい狂いはないから、あたしは真似することにしてるの」

これについては疑わしい気がしたので、ミス・ペティグルーは微笑みただけでした。

「ロンドンをはじめてね」とミス・デュバリーは鮮やかに言っただけでした。

ミス・ペティグルーはこの一〇年間、働いてきた家はみんなロンドンの市内かその周辺ですの、とは言わないでおくことにしました。急に、それを認めるのが恥ずかしくなったのです。せつかくロンドンにいるのに、その幸運をちゃんと役立てていないのは明らかでしたから。

「あたくし、ノーザンブランド州の村で生まれましたの」と言葉をにぎります。

「ああ！」とミス・デュバリーは明るくいいます。「スコットランドね」

「あの……少しばかり違います」とミス・ペティグルー。

「ロンドンからは遠いわねえ」とミス・デュバリーは暗い声で言いました。

「ええ、まことに遠うございます」

「これからこつちに落ち着くの？」

「だといんですけれど」

「大丈夫。すぐこつちに慣れるわ。ロンドンはどこよりも最高よ。時間はかかるかもしれないけど、すぐ田舎っぼさなんてきれいさっぱり消えちゃっわ」

「そう思われます？」

「もちろんよ。専門家のアドバイスさえちょっとあればね」

ミス・デュバリーはいきなり立ち上がりました。ミス・ペティグルーの周りを回りまです。目を細め、顔をしかめて集中しています。ミス・ペティグルーはかちかちに身をすくめて座っていました。ミス・デュバリーが眉を寄せました。親指と人差し指でミス・ペティグルーの顎を持ちます。頭を振り、突然、大声をだしました。

「そんなくすんだ茶色なんて着ちゃだめよ。あなたの色じゃないもの」

「まあ！」とミス・ペティグルーは飛び上がりました。

「全然だめ。あなた、センスをどこにおいてきたの？ 美的感覚はどうしちゃったの？」

「あたくし、持っておりませんの」とミス・ペティグルーはびくびくと言いました。

「おまけにそのお化粧ときたら」

「お化粧！」ミス・ペティグルーが息をのみました。

「お化粧よ」

「あたくしが？」とミス・ペティグルーがかすかな声を絞り出します。

「あなたよ」

「あたくし、しておりませんの」

「お化粧をしてない」とミス・デュバリーはショックを受けました。「なぜ？ 見苦し  
いじゃないの。裸で歩き回るようなものよ」

ミス・ペティグルーはミス・デュバリーの顔を呆然と見つめました。いろいろな考え  
が押し寄せてきて頭の中が大混乱です。考えたこともない発想にめまいがします。そう  
いえば、なぜだったのでしょうか？ これまでずっと、ただの一度も、鼻の頭に白粉をは  
たくというスリルを味わったことは一度もありませんでした。他の女性たちはその愉し  
みを知っています。でもミス・ペティグルーは違いました。それもこれも勇気がなかつ  
たせいです。それもこれも自分でものを考えなかつたせいです。なに白粉だと、と牧師  
補の父はがみがみと言いました。地獄への一本道だぞ。口紅はね、と母はささやきまし  
た。身を持ち崩す第一歩ですよ。頬紅なぞ、と父は怒鳴りました。夜の女のしかける畏  
じやないか。眉墨なんてね、と母は声をひそめました。淑女ならそんなもの決して……！  
ミス・ペティグルーの頭の中にくるくると脈絡もない考えがめまぐるしく浮かびまし  
た。最悪の状態のものを何とかするのが罪かしら？ そう思い、座りなおします。目が  
輝きはじめました。神様の手仕事に手を加えるというのは重大かつ真剣、笑い事ではす  
まされない大事業です。ミス・ペティグルーの女としての全神経がそこに注がれます。  
ところが、そこではつと何かに思い当たりました。背もたれによりかかります。顔が曇  
っています。

「ああ、でも！」とミス・ペティグルーは気が抜けたように言いました。「……私、年  
ですもの。それにこの肌と髪の色合いでは」

「素晴らしい肌じゃない」

「素晴らしいですって？」

「しみもない、にきびもない、吹き出物もない。色なんてなんでもないわ！ 自然のま  
まで平気な人なんている？ そのままでいいなんてこと、絶対にないのよ。土台は完璧  
だわ。全然、手を入れなくて大丈夫。なんとかしなきやいけない欠点もないし。ブロン  
ドでもブルネットでも、ピンクに白肌、小麦色、クリーム肌だって何でも自由自在よ」  
ミス・デュバリーは前に身を乗り出しました。ミス・ペティグルーの顔をこちらに向  
けます。それから反対に向けます。肌をぴたぴたと叩きます。そして髪の手触りをしら  
べました。

「ふむ。上等なクレンジング・クリームがいるわね。強めの収れん化粧水ではりを出し

て、と。眉はぜつたい濃いほうがいいわ。そうね、髪はどついたらいいかしら。ナット  
ブラウンがいいと思うけど。頬紅を入れなくちゃね。それはぜつたいだわ。目の青さを  
引き立てて。とにかく顔全体のお手入れをしなくちゃ。こんなにほつたらかしなんてシ  
ョックだわ」

急に口をつぐむと申し訳なさそうな顔をしました。

「あら、あたしつたら！ ごめんなさい。いっつもそつなの。我を忘れちゃうのよ。そ  
ついう仕事をしてるから、ついプロの目で見ちゃうのよね」

「お気になさらないで」とミス・ペティグルーがささやきます。「どうぞお気になさら  
ず。素敵ですわ。これまであたくしの顔に興味をもつた方なんて一人もおりませんでし  
たから」

「見れば分かるわ」とミス・デュバリーはいかめしく言いました。「ご本人を含めてね」  
「なにやかやと忙しくしておりまして」とミス・ペティグルーは言い訳しました。

「何を言ってるの。身体を洗う時間はあるでしょ？ お風呂に入るんじゃない。爪も切  
るでしょ。顔は女が一番に果たさなきゃいけない責任よ。なんてこと言つつのよ」

「ええ、でも」とミス・ペティグルーは情けなさそうにため息をつきました。「もう、  
そついう年は過ぎてしまいましたし……」

「女はね」とミス・デュバリーは不吉な声で言いました。「何があつてもそついう年を  
過ぎるなんてことはないの。年を重ねれば重なるほど、お手入れをする理由が増えるの  
よ。あなた、もうちよつと分別があつてもいいお年じゃないの？」

「お金がありませんでしたもの」

「ああ！」とミス・デュバリーはなるほどというふうにならずきました。「それなら別  
よね。このあたしでも顔をちゃんとしておくのにどれだけかかるか、あなた聞いたら眉  
に唾するわよ。この商売をしてるおかげでほとんど九九パーセントは割引みたいなもの  
なの」

そしてハンドバッグをとるとそれを開けました。

「あたしの名刺よ。いつでも好きなときにそれをもってきて。そしたらとにかく最高の  
お手入れをしてあげるから。デリシアの友達はあたしの友達よ。もし手があいてたら、  
あたしがやってあげる。もし忙しかったら、一番腕のいい子に任せるわ」

「なんて素晴らしいんでしょう」とミス・ペティグルーは口をぱくぱくさせました。震  
える指で名刺をとり、

「エディス・デュバリー」胸をときめかせて読みました。

「あなたがロンドンの人間じゃないのは明らかね」とミス・デュバリー。「その名前に  
ぴんと来ないなんて。ロンドン一美容院なのよ。ま、たまたまあたしの店なんだけど  
ね」

ミス・ペティグルーの顔が輝きだしました。

「本当ですの？」一生懸命に聞きます。「本当に本当ですの？ つまり、いついつと」

ろでは外見を美しくすることができませんの?」

ミス・デュバリーは座りました。ためらい、そして椅子を近くに寄せました。

「あたしを見て」

ミス・ペティグルーはまじまじと見つめました。ミス・デュバリーは楽しそうにくすくす笑います。

「あなた好きだわ。なんだかふつつと違つっていつか……まあいいわ! あたしのことどう思う?」

「まあ、どうしましょう!」とミス・ペティグルーは困り果てました。「何を申し上げたらいいんでしょう?」

「ただ思ったことを言つてよ。あたしは気にしないから。でも正直にね」

「そうですね」とミス・ペティグルー。そして思い切って「あたくし……あなたはとても……とても人目を引く外見をしてらっしゃると思いますわ」

ミス・デュバリーはとても嬉しそうな顔をしました。

「そうそう、その調子よ」

ミス・ペティグルーは調子が出てきました。ミス・デュバリーがずけずけ思ったとおりのことを言えるなら、できないことはありませんとも。

「ミス・ラフォースのようにお美しくいっわけではありません。でも目を引きます。部屋に入ってこられると、みんながあなたに注目しますわ」

「わかったでしょ」とミス・デュバリーは鼻高々に言いました。「あたくし、言ったじゃない?」

「何を?」とミス・ペティグルー。

「だからさつきから言つてるでしょ」

「何をおっしゃいましたっけ?」

「あなたとあたしはね」とミス・デュバリー。「そっくりなのよ」

「まあ……そんなことおっしゃって!」とミス・ペティグルーは耳を疑いました。

「あなたは秘密をべらべらしゃべるタイプには見えないわね」とミス・デュバリーは言い放ちました。

「しゃべりませんか」とミス・ペティグルー。

「それに、あなたみたいにならずぶのしろつとさんに会つとね、どうしても素敵な秘密を教えてあげないではいけないのよ」

「いられませんの?」とミス・ペティグルーは用心しいしい聞きました。

ミス・デュバリーはさらに身を乗り出します。

「あたしの髪ね」とはじめます。「もべら色なのよ……あなたみたいに」

「まさか!」ミス・ペティグルーが息をのみました。「嘘ですわ」

「ほんとよ。でもあたしは黒のほつが似合つと思つたの」

「もちろんですわ」

「あたしの眉とね」とミス・デュバリーは続けます。「まつげは砂色なの。だから眉毛を抜いて新しくペンシルで描いたの。まつげは色もひどいけど、短いのよ。だから新しいのをつけてもらったの。黒くて長くてカールしているやつを」

「すばらしいですわ」とミス・ペティグルーがささやきます。ようやくミス・デュバリーのびっくりするような目の秘密がわかりました。

「髪とまつげの色がちぐはぐな上に、肌の色がぱっとしなくて寝ぼけてるの。クリームがかかった白い肌のほうがずっと効果的でしょう」

「おっしゃるとおり」とミス・ペティグルー。

「鼻が難題だったわ。鼻ではあなたのほうが勝ってるわよ。でもマコーミック先生ってたいした腕前なの。新しいのをつけてくれたのよ」

「まさか」とミス・ペティグルーがあえぎます。

「それに歯並びがまた、ひどいものだったのよ」とミス・デュバリーが打ち明けました。

「隙間の幅がまちまちだったの。五〇ポンドも払ったけど、その甲斐はあったわ」

ミス・ペティグルーは後ろにもたれかかりました。

「信じられせんわ」か細い声で言います。「まことに信じがたいことですわ」

「耳のことを忘れてたわ」とミス・デュバリー。

「横に突き出たのよ。でもマコーミック先生は名医だって言ったでしょ？ あつという間に直してくれたわ」

「そんなことがあるでしょうか」とミス・ペティグルーは言葉もありません。「つまり、それじゃあなたはもうあなたじゃございませんわ」

「ほんのちよっと手をかければ」とミス・デュバリー。「不思議や不思議、よ」

「奇跡ですわ」とミス・ペティグルーはきつぱりといいました。「奇跡ですわ。あたくし、これから女の方を見ても信用できませんわ」

「どうしてよー！」とミス・デュバリー。「あたしたちみんな裸でうろろして威張っているだけでもいいの？ ペティコートを脱いでパウダーもふいちゃって、ブラジャーをはずしてまつげも捨てろってこと？ 美に背を向けて、生まれたままのみつともない姿に戻っていいの？」

「ミス・ラフォーヌだけは違いますわ」とミス・ペティグルーは消え入りそうに、でも義理がたく言いました。「あたくし、あの方が……お風呂から……出た……そのままを……見たんですもの」

「ああ、デリシア！」とミス・デュバリー。「あの人は違うわ。生まれつき恵まれているもの」

そして寢室のドアをちらりと見やりました。また顔を曇らせます。

「急いでくれないかしら。あたしにうちもさうちもいなくなってるの。あの人はいつもうまい解決を見つけてくれるのよ」

ミス・ペティグルーは目頭が熱くなりました。

(なんて美しいんでしょう！)とうつとろと思えます。(こんな美しいものって他に  
あるかしら？ 女どろしの友情。それなのに、世の中の人は、女はお互いを信用しないな  
んて言うんだから！)

「困っているときには女の方ほど頼りになるものはありませんわ」とミス・ペティグル  
ーはため息をつきました。

ミス・デュバリーは身ぶるいしました。

「とんでもない！ そんなこと信じちゃだめよ」と熱心に言います。「あたしはデリシ  
ア以外の女になんかぜつたい頼らないわ」

「そうなんですの？」びっくりしてミス・ペティグルーが聞きました。

「そう、デリシアはね、彼女は別なの。あの人はあ的美貌でしょ、男に不自由すること  
がないのよ。だから信頼できるの」

「確かに」とミス・ペティグルー。「分かりますわ」

「彼女は人の男をとろつなんてしないの。いえね、ふざけて気があるふりをするのはい  
いのよ。そういうゲームをしない女は人間じゃないわ。でもやり方っていつもがある  
でしょ。デリシアは人の見てないところで男をそそのかして愛想をつかさせようなんて  
しないの。いないところでは一番いいことを言つもの」

「あの方らしいですわ」とミス・ペティグルーは胸をはりました。

「ええ、そうよね。忘れてたわ。あなたはデリシアの古いお友達だったのよね。ああど  
ろしよう！ 早くしてほしいわ。何か考えてもらう時間なんてなくなっちゃう」

「どうして美容室をお持ちになるようになったの？」とミス・ペティグルーはそつ  
なくミス・デュバリーの気持ちを心配事からそらせようとしました。「とてもお若く見  
えますのに。ご無礼でなければ、あたくしぜひ伺いたいですわ」

「ああ、そのこと」とミス・デュバリー。「簡単よ。あたし、ボスを誘惑したの」

「ボスを誘惑した！」とミス・ペティグルーは息も絶え絶えに繰り返しました。「まあ、  
なんてことでしょう！ いったいどうやってそんなことを思いつきましたの？」

「なんでもないので。あたしは一八歳だったわ……見習いだったの。彼はもう年でね。  
年よりって若い女に引つかかるものよ……こつちが頭をつかえばの話だけど。その点、  
あたしはいつだって頭が働くの」とけろりとして言いました。「結婚してくれなきゃ別  
れるわ』って迫れば、たいていは結婚するわよ。あたしはすごくラッキーだったの。彼、  
あたしに夢中になったけど、つかつかしすぎちゃったのね。だからあの人立派な墓石を  
手に入れて、あたしはサロンを手に入れたってわけ」

「なにことも公平でなくてはいけませんわ」とミス・ペティグルーは何を言っているか  
分からず、あいまに言いました。

「当然の報酬よ」とミス・デュバリーはあっさりと言いました。「でもね、ほら！ ち  
よつとした手間もかけないで何かを手に入れようたつて無理な話よ。それに彼は悪い  
人じゃなかつたわ。もつと悪い男だつて見てきたもの。それにあたし馬鹿じゃなかつた

し。ちゃんと結婚はしたけど、仕事のことをしつかり学んだの。その甲斐はあったわ。知ってる？ 今、あの店、彼が死んだときの三倍の価値があるのよ」

「さすがやるじゃんですわね」と、ミス・ペティグルーは簡単に、流行語らしきものを使って言いました。

「あたしが価値をあげたのよ。あのビジネスのね。もちろん、名前も変えたわ。デュバリーにしたの。だってほら、聞いた人はデュ・バリーだと思っしょ。そつするといろいろ期待するじゃないの。名前っていうのは大事なのよ。すぐくつまい選択だったと思ってるわ。少なくとも」とミス・デュバリーは正直に言いました。「考え付いたのはデリシアだけど、使ったのはあたしが先だったわ」

「言っことなしのお名前ですわ」とミス・ペティグルーが褒めました。「最高ですわ」と何も考えずに付け足しました。

ミス・ペティグルーはなんとかして自分の善悪の基準を立て直そつとしました。でもどつしようもありませんでした。すつかり心を奪われていたからです。そもそも、あたしくしい悪いを言っ権利があるかしら？ あたくしだつて、この一〇年間、あつちにもこつちにもぞろぞろいるブルムガン夫人たちから逃げ出せるんなら、結婚してくれといふ男が現れてさえいれば誰でもいいから結婚したんじゃないかしら？ もちろんしに決まつています！ どつして格好をつけることがあるでしよつ？ 他の年をくつた愚かな女たちといつしよになつて、選択の余地がなかつたことを棚上げて、若い女性たちよりも自分のほつが上等だといふふりをするなんて。そらぞらしいお説教なんてくそくらえです。ミス・ペティグルーは身を乗り出すと、目を輝かせてミス・デュバリーの膝を叩きました。

「あたくし」とミス・ペティグルー。「あなたは素晴らしいと思いますわ。若いとき、あなたの半分もおつむがあつたらよかつたんですけれど。今頃は幸せな未亡人でしたでしよつ」

「チャンスの中に運命が隠れているのよ」とミス・デュバリーが慰めます。「忘れちゃだめよ。それからチャンスがめぐつてきたらひつつかまえるのよ、もちろん」

「チャンスがめぐつてきたとしても」とミス・ペティグルーは悲しげに確信をもつて言いました。「ひつつかまえることはできなかつたでしよつ。あたくし、そついうタイプじゃありませんでしたもの」

「あきらめちゃだめ」とミス・デュバリー。「まだ人生の本番はこれからよ」

そしてミス・ペティグルーの膝をお返しに叩きました。そのとき、また、香水の繊細で誘惑的な香りがミス・ペティグルーの鼻を刺激しました。

「なんていい香りでしよつ」とミス・ペティグルーはうつとりと言いました。

「でしよつ？」とミス・デュバリーが満足げに言いました。

「これまでこんな香りをかいだことがございせんわ」

「まずないでしよつね。イングランドでこの秘密を知っているのはあたしだけですも

の

「まあ素敵！」ミス・ペティグルーは目を見張ります。「お高いものですか？」

「一オンスで九ポンドよ」

「なんですつて？」とミス・ペティグルーはあえぎました。

「まあね。原価は一六ペンスだけだ」

「それで皆さん、お買いになるの？」ミス・ペティグルーの声が震えます。

「売れば売るだけね。でも長い目で見たら、いつも在庫が足りないように見せかけておいたほうが、需要が安定するものなのよ。初めは多く売れるかもしれないけど、まだいくらでもあると思うと、お客のほしいという気持ちがいぼんじやうの。あたしのお客は特別でいるのが好きなの」

「一六ペンス」とミス・ペティグルーは気が遠くなりそうでした。「九ポンド」

「いやね、ただの仕事よ。だって、他に作れる人がいないんだから、あたしは当然、高くとるわよ。秘密がもれちゃったら一発で値段は下がるでしょうね。人は他にないものにはお金を払うのよ」

ミス・ペティグルーの好奇心はショックを乗り越えました。

「でもどうやって、もし何つてもよるしかつたらですけど、どうやってその作り方をお知りになったの？」

「その話をすると長いのよ」とミス・デュバリー。「ちゃんと話せばね。あたしね、フランスで在庫を仕入れていたの。そこでガストン・ルブランに会ったのよ……今、一番の香水の専門家よ。だからね、つまり、こんなチャンス逃すのはもったいないと思って、ちよつとばかり「残業」したつてわけ。彼の頭にあつたのは、もちろん、両方のビジネスを合併することだったわ。あたしだって馬鹿じゃないもの。つまり、そうだったのはあたしの魅力のせいだけじゃなかったつてわけ。まあね、彼をふつたりもしなかったわ。だから婚約の贈り物として例の秘密を教えてください。分かるでしょ！ 彼にしたら一ベニーもかからないし、家族なんだから秘密は安全つてことでしょ。そのあとあたしはイングランドに帰つてきたの」

「イングランドに？」とミス・ペティグルーは啞然としました。

「あたりまえよ」とミス・デュバリーはぶんぶんと怒つています。「今、説明するところよ！ だって彼、あたしと結婚したかつたんじゃないのよ。あの人にはデュバリーの店と結婚したかつたの。そんなことにこのあたしが気づかないと思うなんて。こういう大陸流のやり方は許せないわ。あの人、あたしの仕事がなかったら、あたしと結婚しようなんて思いもしなかったんだから。そんなあたしはいや。男だったら結婚の申し込みに少し情熱をこめてほしいじゃないの。イギリス男はビジネスじゃなくてベッドに入りがるものよ。あたしたちはそう思うつように育てられてきたの。三つ子の魂百までつて言つじやない」

「もちろんですとも」とミス・ペティグルーも憤然として言いました。「だめですわ」。

そんな考えなんて！ まったくビジネスなんて！」

ミス・デュバリーはハンドバッグに手をつ込んで、コンパクトを出しました。そして新しく口を描きはじめました。ミス・ペティグルー立ち上がると、マントルピースの上の鏡に映った自分を見つめました。中年の兆しは皺や小じわにはそれほど現れていませんが、なんとなしに雰囲気に出ています。どこか老けた感じの表情。目に浮かんだ疲労。生気のない顔。まっすぐで細い、もぐら色の髪。くたびれた薄青い瞳。色あせた唇。痩せた顔。冴えない、黄色がかった肌。

(無駄だわ)とミス・ペティグルーは思いました。(おしろいを塗ったり粉をはたいたり、何をしたらいいけれど、ちゃんとしたお食事をしていないんですもの、この不健康な顔色はどうしようもないわ。それに、どっしたらちゃんとした食べものを手にいれられるか見当もつかないんだから)

急にミス・ペティグルーは目の前が暗くなりました。元気がしほみ、怖くなってきます。そのとたん、目の前の顔におどおどした不安が浮かびました。それは老いであり、破壊する力でした。それは若さの印をすべて消し去ってしまいました。

ミス・ペティグルーはあわてて鏡の中の自分の顔から目をそらしました。座っているミス・デュバリーをじっと見つめます。高価な衣服、つやつやした黒髪、真っ赤な唇、そして美しい、魅力的な肌の色。

(無理よ)とミス・ペティグルーは絶望的に考えました。(あたくしがこの方みたいになるうなんて無理な相談ですよ。たとえ若かったとしても同じこと。塗ればいいというものじゃないのよ。中身の問題なんですよ)

そしてまた椅子に戻りました。そのとき寝室のドアが開き、ミス・ラフォースが出てきました。